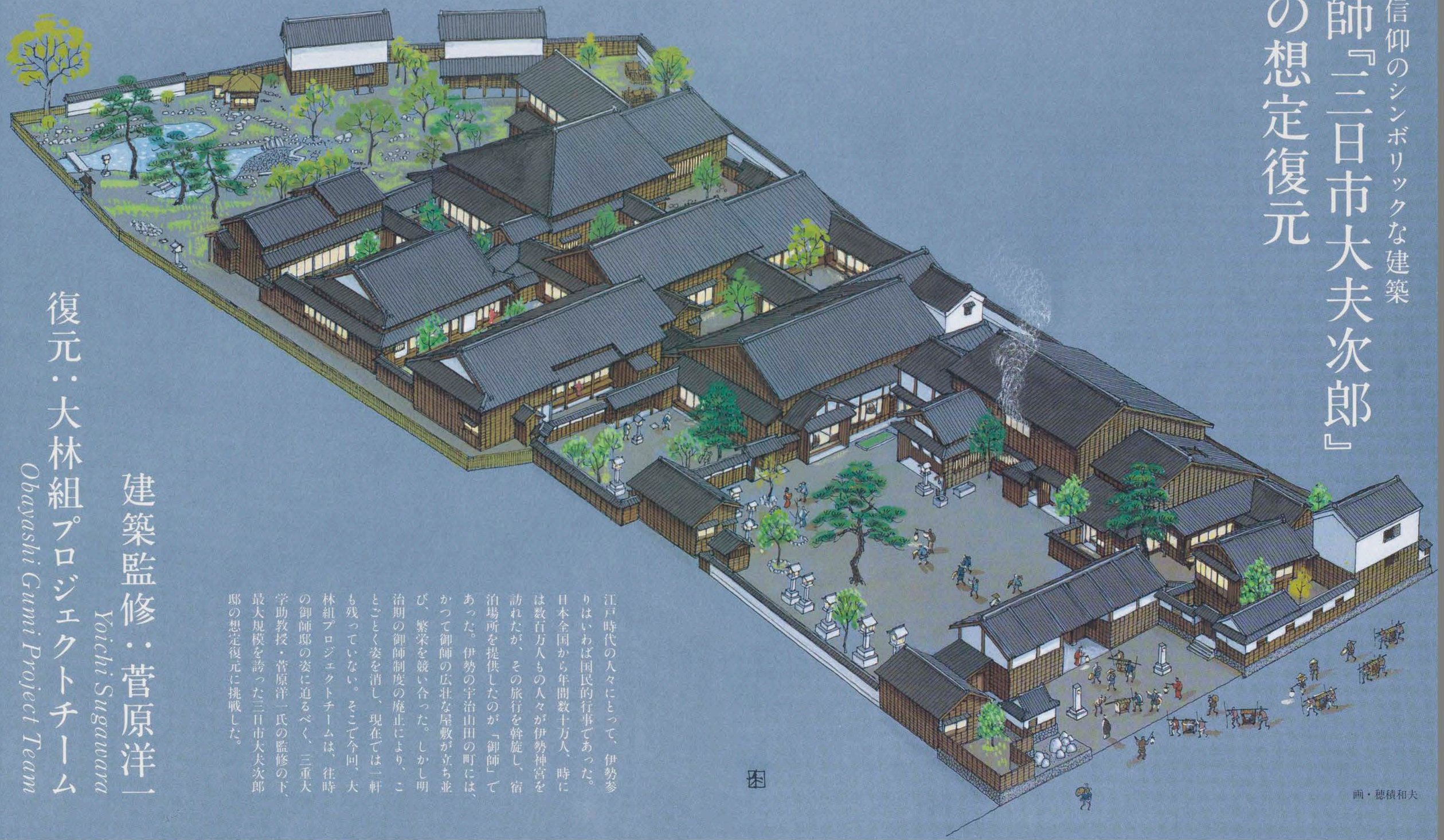
伊勢信仰のシンボリックな建築

御師『三日市大夫次郎』邸の想定復元



画・穂積和夫

江戸時代の人々にとって、伊勢参りはいわば国民的行事であった。日本全国から年間数十万人、時には数百万人もの人々が伊勢神宮を訪れたが、その旅行を斡旋し、宿泊場所を提供したのが「御師」であった。伊勢の宇治山田の町には、かつて御師の広壮な屋敷が立ち並び、繁栄を競い合った。しかし明治期の御師制度の廃止により、ことごとく姿を消し、現在では一軒も残っていない。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、往時の御師邸の姿に迫るべく、三重大学助教授・菅原洋一氏の監修の下、最大規模を誇った三日市大夫次郎邸の想定復元に挑戦した。

建築監修：菅原洋一
Yoichi Sugawara

復元：大林組プロジェクトチーム
Obayashi Gumi Project Team

一、伊勢信仰と御師

近世の伊勢信仰

「伊勢に行きたい　伊勢路がみたい
　せめて一生に一度でも
わしが国さは　お伊勢が遠い
　お伊勢恋しや参りたや」

『伊勢音頭』にそう詠われたように、中世末から近世を通して、日本人にとって伊勢神宮のある伊勢の地は特別な場所であった。とりわけ江戸時代には、日本全国津々浦々どんな小さな村にも伊勢講（信者の組織）が組まれ、人々は集団で、遠路をいとわず伊勢をめざした。現代のように気軽に海外旅行のできる時代からは想像もできないが、当時の人々にとって、伊勢参りは一生の願いであり、最高の楽しみだったのである。

近世初期に来日したイエズス会の宣教師ルイス・フロイスは、故国ポルトガルへの手紙に、こう書き記している。

「日本諸国から巡礼としてこの神（天照大御神）のもと（伊勢神宮）に集まる者の非常に多いことは信ずべからざる程で、賤しい平民だけでなく、高貴な男女も競って巡礼する風があり、伊勢に行かない者は人間の数に加えられぬと思っているかのようである」

こうした報告はフロイス一人に限らない。その後の鎖国時代に来日したケンペル、ツンベルク、シーボルトらも、江戸参府の行き帰りの見聞として、同様の報告を残している。当時、伊勢参りをする人々がいかに多かったか、外国人の眼からもそれは驚異的なほどだったのである。

一七一八年（享保三）、伊勢の山田奉行が幕府に提出した記録によると、正月三日から四月一五日までの参宮者数は四二万七五〇〇人にのぼる。わずか三カ月半の期間に、公式記録だけでこれほどの人々が伊勢参りをしたわけである。ただし、この時期は農閑期にあたり、参宮者の多くを占める農民たちが一斉にやって来る季節であることを考慮すると、年間の参宮者数は五〇万人前後であったろうと推定されている。

そのにぎわいは、井原西鶴が『織留』のなかで、「神風や伊勢の宮ほどありがたきは又もなし、諸国より山海萬里を越て貴賤男女、心ざし有程の人、願ひのごとく御参宮せぬといふ事なし、殊更春は人の山なして、花をかざりし乗掛馬の引つづきて、在々所々の講まいり…」

と描いた様子そのものだったであろう。

庶民の伊勢参りの中心的役割を果たしたのは、全国の村々に組織された伊勢講であった。講とは、簡単にいえば信者（檀家）の組織であり、本来の目的は法話を聞くといった宗教的なものだったが、のちには団体で社寺参詣をする時の母体ともなった。講のなかで旅行費用を積み立て、講仲間が交代で社寺参詣をするのである。有名な社寺には、それぞれ数多くの講が組織されていたが、なかでも伊勢講は群を抜いて多く、一つの村に複数の伊勢講があることも珍しくなかった。

講とは別に、単独で、あるいは少数で思い思いに伊勢参りをする人たちもいた。講に所属しない奉公人や親の許しが得られない若者などが、届け出をせずに勝手に伊勢参りをすることを「ぬけ参り」といった。ぬけ参りは、その名のとおり正式な伊勢参りではないとはいえ、各地にぬけ参りに関する逸話（藩による取り締まりや子供たちの出奔など）が残っており、全国共通の現象で、その数も少なくなかった。

地方によっては、ぬけ参りが成人となるための通過儀礼として認知されていたり、あるいは娘たちだけのぬけ参りを半ば公認していた地域もあったのである。

また江戸時代には、数十年ごとに「おかげ参り」という現象が起こった。おかげ参りとは、伊勢神宮のおかげで奇跡が生じたといった噂が全国へ広まり、霊験にあやかろうとする人々が大挙して伊勢に押しかけるのである。一七〇五年（宝永二）のおかげ参りでは、本居宣長の『玉勝間』によれば五〇日間に三六二万人もの人々が伊勢に押し寄せ、一日当たりの最高では二二万～二三万人にのぼったと記されている。

公式の数値ではないとはいえ、おかげ参りの時には、奉公人たちは主人に内緒で、小さな子供たちさえ親のとめるのも無視して、群れをなして伊勢をめざしたといわれ、その混雑は大変なものであったろう。「太神宮」「おかげ」などと書いた菅笠を付け、腰に柄杓を差し、幟を立てるといった独特の姿をした参詣者たちが、伊勢へ向かう街道にあふれた。

一方、街道筋の商家や民家では、おかげ参りの人々のために宿泊場所や食事などを積極的に提供した。したがっておかげ参りの時ならば、路銀のない人たちでも念願の伊勢参宮ができたのである。このようなおかげ参りの現象からも、当時の日本人の精神的根底にあった伊勢神宮への思いの一端をうかがい知ることができるだろう。

伊勢信仰がこれほど深く人々の心に根ざし、一生に一度は伊勢へという強い思いを抱くようになるには、もちろん歴史が必要であった。その歴史のなかで、伊勢神宮と人々を強く結び付け、伊勢参りのための仲介役を果たしたのが「御師」と呼ばれる人々だったのである。

御師の歴史

御師の起源には諸説あるが、御祈禱師、あるいは御詔刀師の略されたものとするのが一応の定説となっている。人々のさまざまな願いを受けて、神前で祈禱を行う神官のことである。

こうした御師の存在は、伊勢だけでなく、熊野、富士、白山、出羽などの聖地では古代から知られていた。一般には「おし」というが、伊勢に限って「おんし」と呼ばれた。それだけ伊勢の御師は、人々にとって特別な存在であり、影響力も強かったのである。

伊勢神宮は本来、天皇の祖神・天照大御神を祀ることから、一般の人々が幣物（供物）を捧げ、祈願をすることは禁じられてきた。これを「私幣の禁」といい、『延喜式』などに明記されている。

ところが現実には、平安末期頃から貴族や豪族（武家）階級のあいだで、伊勢神宮への土地や物品の寄進が目立つようになる。とくに新興勢力であった武士階級は、武運長久を祈願してもらうと同時に、自分たちが開発したり手に入れた土地の一部を寄進する形で、伊勢神宮の神威の下に領地の安堵を願ったのである。

一方、伊勢神宮の側からみると、平安中期頃から律令制の弱体化により日本全国の荘園化が進み、従来の神領（神戸）からの収益による経営が成り立たなくなった。そこで神官たちは、伊勢地方に新たな田地を開墾するとともに、貴族や武家から田畑の寄進を受け、それら御厨・御園により新たな経営基盤を整備するようになった。その役目を中心的に担ったのは、度会氏や荒木田氏などの伊勢地方の在地勢力によって構成される下級神官の権禰宜層であった。

権禰宜の本来の役目は、正規の神官である禰宜を補佐することだが、そればかりではなく、伊勢神宮の遷宮費用を得るために全国の田地に課せられた役夫工米（臨時課税）制度の実施者として、一一世紀頃から全国に展開し、地方とのつながりをもっていた。また、御厨などにおける年貢徴収の実務も、彼らが担っていた。そこで地方の武家たちとの接触を深め、私幣を禁じられた伊勢神宮本体に代わって祈禱を行うと同時に、寄進を受けた田畑の実際の権益を握ることで、大きな力をもつようになっていったのである。

早い時期の例としては、『吾妻鏡』に源頼朝が神宮の外宮の権禰宜・度会光倫（相鹿二郎大夫）などに祈願状を託し、神宮に神馬や砂金、あるいは御厨を寄進したことが記されている。また、権禰宜は官位が五位であることから、「大夫」を名乗っていたことも知ることができる。

こうした権禰宜層こそが、伊勢の御師の中心であり、彼らの活躍によって伊勢信仰は急速に全国に広がっていったのである。

室町時代から戦国時代へと進むにつれ、伊勢の御師はさらに武家との関係を深め、大名を「檀家」として師壇関係を結ぶことで強固な地盤を築いていった。織田氏や豊臣氏の御師であった上部大夫、毛利氏の村山大夫、徳川氏の春木大夫というように、檀家は固定化し、御師の役割も単に武運長久の祈願だけでなく、ときには大名のために兵糧米を調達したり、負け戦の時にはかくまったりと、その関係は親密化していったのである。

徳川家康が天下を掌握したとき、豊臣家を檀家とした上部大夫に対して、

「汝は祈り負けてさぞや悔しいであろう」

というと、

「いや、当家は時の将軍の武運長久を祈りまする」

平然とそう答えて、かえって気に入られたという逸話が残っている。御師の微妙な立場と、隠然たる実力を感じさせる。

当時の武士のあいだでは、伊勢神宮を日本の宗廟とする考え方がすでに一般化していた。さらに近世初頭の陽明学者・中江藤樹が、「大神宮は吾朝開闢の元祖なり、日本に生るる者、一たび拝せずんばあるべからず」

そう述べているように、伊勢信仰はより現実的な伊勢参りという形をとり、「一度は伊勢へ」という国民的義務観へと発展していったのである。

戦乱の世が終り江戸時代に入ると、人々のあいだに社寺参詣が盛んになるが、なかでも伊勢神宮は参拝者の出身地の広範さと参拝者数の多さで図抜けた存在であった。その背景には、伊勢の御師の檀家層が、貴族や武家だけでなく、富裕な農民層からさらに庶民へと急速に広がりをみせたことが挙げられる。

伊勢の御師が組織した檀家の数は、一七七七年（安永六）の記録によれば、北海道の松前から九州の薩摩まで約四三九万軒に達している。一軒当たりの家族数を五人とすると、信者数は約二二〇〇万人にものぼる（宮本常一編『伊勢参宮』による）。江戸時代の日本の総人口は三〇〇〇万人前後で推移したといわれるので、伊勢神宮の信者がいかに多かったかは驚くべきものがある。

この記録からも分かるように、御師の活動範囲は北海道から南九州にまで及び、津々浦々の村人たちを檀家として組織した。そして彼らが伊勢参りをするための、さまざまな環境づくりを行ったのである。

では全国の檀家を掌握し、伊勢信仰を広めた御師の活動とは、実際にはどういうものだったのだろうか。

御師の活動

①檀家廻り

「これは伊勢の御師で御座る、毎年今時分は、国々旦那廻を致す、当年も廻らうと存ずる、誠に大神宮の御影程有難い事は御座らぬ、斯様に国々廻れ

伊勢市航空写真　写真／国土地理院　平成６年撮影

同上　三日市大夫次郎邸跡拡大写真

■三日市大夫次郎邸跡

■久保倉大夫邸跡

ば、何方にても御馳走にあふ事で御座る」

狂言の『禰宜山伏』に登場する伊勢の御師が述べているように、御師のもっとも重要な仕事は全国の旦那（檀家）廻りであった。

伊勢の御師は毎年暮近くになると、各地の檀家を廻り、大麻を配って歩いた。大麻とは、「天照皇大神宮」「豊受大神宮」などと記された御祓札で、伊勢神宮と人々を結ぶ信仰の象徴だったのである（ただし、実際には御師が独自に出すもので、伊勢神宮本体とは関係なかった）。

御師はそのほかに伊勢土産として、伊勢暦、伊勢白粉、帯、茶、鰹節、海苔、のし鮑など、さまざまな物品をもって行った。なかでも伊勢暦は、京都の土御門家の暦本を基に作られるもので、「八十八夜、二百十日」といった農事に関わる記述に加え、日々の吉凶も記されていたことから、当時の人々に非常に重宝された。暦が日本中に広まったのも、御師のおかげといわれるほどである。

また土産の品目には、それぞれの地方で必要とされる嗜好品や日用雑貨を加えることで、付加価値を高める工夫もしている。地方への流通機構の乏しかった江戸時代、それ故にどの地方でも「お伊勢さん」と呼ばれ、歓迎されたのである。

一方、檀家たちは、御師に応分の初穂料を納めた。ここでいう初穂料とは、建前は神宮への奉納金(物)だが、実際には大麻や土産への代価に相当した。井原西鶴の『世間胸算用』には、

「かれこれこまかに値段つけて、二匁八分が物申請けて、銀三匁御初尾（初穂）上ぐれば、高て二分余りて、お伊勢様も損の行かぬやうに……」

とあるように、御師の活動には多分に商業的性格もあった。

西鶴は「お伊勢様にも損の行かぬように」と控え目に書いているが、文化期の記録として、伊予（徳島）のある地方で約二〇〇〇軒の檀家廻りをした御師の純利益が一八両三歩（初穂料四八両二歩・諸費用二九両三歩）になったという。有力な御師になると、その檀家数は一〇万～三〇万軒以上にものぼるので、檀家廻りは莫大な利益を生むのである。

実際に檀家廻りをするのは、御師の代理人である代官・手代であった。二、三人がひと組となり、目印の榊の枝をかつぎ、

「伊勢の御師継上下で紺の足袋」

川柳にもそう詠まれた袴姿で、村々を廻ったのである。

②参宮者の宿泊

伊勢の御師のもう一つの重要な仕事は、伊勢参りをする檀家の宿泊であった。

神官が参拝者を自邸に泊めることは、熊野三山では相当古くから行われていたといわれる。まだ旅館業の発達していなかった時代、参拝者の便宜を図ったものであろう。伊勢の御師がいつ頃から参拝者を宿泊させるようになったかは不明だが、御師と檀家との関係が緊密になった江戸時代には、檀家が伊勢参りをする時にはかならず御師の屋敷に泊まるのが決まりごととなっていた。

伊勢講の中心となる農村部の檀家は、農閑期に団体で伊勢参りをする。それだけに伊勢参りのもっともにぎわうのは冬、それも正月からの三カ月で、その間は御師の屋敷では連日のように檀家たちの宿泊・接待でもちきりとなるのである。

御師によるもてなしや宿泊の様子は、おおむね次のようなものであった。

まず神宮の聖域への入口となる宮川の渡しに檀家たち一行が着くと、茶屋で一服しながら、御師の家に伊勢到着を告げる。すると御師の手代が迎えに出て挨拶を述べ、歓迎の酒席となる。それから茶屋が並び、三味線弾きなどの大道芸人たちが客を引くにぎやかな参道を抜け、町へと入り、いよいよ立派な門構えの豪壮な御師の屋敷へと着く。

そこではまず小豆餅とソウメンが出されるのが慣例だった。そして風呂で身を清め、座敷に通され御師の挨拶を受ける。夜には御師邸の神楽殿で神楽を奉納し、御祓を受ける。それから広間で直会となり、山海の珍味に彩られた豪華な食事に目を見張りながら舌鼓をうったあと、見たこともない柔らかい絹の夜具に包まれて眠りにつくのである。

御師邸でのもてなしの数々は、地方からやって来た多くの参宮者にとって見るもの聞くもの珍しく、夢見るような心地がしたことであろう。『伊勢参宮紀行』の著者・井上了閑は、その様子を次のように描いている。

「案内せられて大夫の館に着、礼儀調え、書院座敷に通れば床には守武の手跡の一軸を懸られ、花かめには杜若をいけ、（食事は）川に漁り、海に釣、野山を求め、（就寝時の）夜には綾緞子に暖め……」

あまりのぜいたくに、了閑は身に過ぎることと遠慮した。すると御師から「あなたは神の客なのだから」といわれ、かえって空恐ろしくなり、涙がこぼれたと記しているほどである。（ちなみに文中の守武とは、室町時代の連歌師で内宮の禰宜であった荒木田守武のことである）。

翌日は、御師の家の者の案内でいよいよ参宮の運びとなる。参拝は、外宮（豊受大神宮）から始めて内宮（天照大神宮）へというのが昔からの順序であった。神域には正殿のほかに末社も多いので、相当の時間を要したが、御師手配の駕籠で廻るのが普通だった。

その途中には、有名な万金丹を売る薬店、西鶴の『織留』にも描かれた小屋掛けの女芸人お杉、お玉を始めとした名物芸人たち、そして伊勢音頭でも知

られた華やかな古市の遊郭など、見どころもたくさんあった。とくに古市は、妓楼七〇軒、芝居小屋二軒の並ぶ、江戸・大坂にも負けない有数の花街を形成していた。

「伊勢参り大神宮へもちょっと寄り」

川柳にそうあるように、当時の人々にとっての伊勢は、聖と俗を合わせもった一大観光地としての魅力に溢れていたのである。

参宮と見物を済ませ、いよいよ伊勢を出立するときには、檀家たちが購入した伊勢土産などを故郷へ送り届ける手配も御師がしてくれた。そして駕籠で宮川の渡しまで送ってもらい、茶屋で別れの酒を酌み交わす、というように最後まで至れり尽くせりのもてなしを受け、一行は伊勢をあとにしたのである。

こうしたもてなしに対し、檀家たちは御供料・神楽料・神馬料といった名目の代価を支払った。なかでも神楽には等級があって、最高の太々神楽ともなると神楽殿の中央にしめ縄を張って榊を盛り、おおぜいの祈禱師・神楽役人らが居並び、釜に湯を煮立たせ、儀式が長時間にわたり行われた。神楽料は五〇両前後という高価なもので、これも御師の重要な収入源であったが、とくに関東の檀家たちは気前よく太々神楽を奉納したといわれる。

伊勢を発った檀家たちは、そのあと上方見物へと足を延ばすことが多かった。

世田谷区教育委員会編集『伊勢道中記史料』にみられる例では、江戸・世田谷村の伊勢講の人々は伊勢の龍大夫邸を出立したあと、一部はそのまま帰国しているが、多くは伊賀越えで大和（奈良）に出て唐招提寺や法隆寺などを見物し、さらに高野山から大坂へと向かっている。そこからさらに船で淀川を上って京へ向かう組と、四国の丸亀に渡り金比羅詣でをする組とがあった。地方からの参宮者にとって、伊勢参りは上方見物や金比羅詣で、西国札所巡りなどとセットにしてとらえられていた面があり、旅行日程も二カ月から三カ月に及ぶことも珍しくなかったのである。

しかし、旅行の最大の目的はやはり伊勢参りであり、一生に一度は伊勢へという思いが原動力となっていた。そうした庶民の思いを現実のものとしたのが御師であり、その点からみると御師は単に祈禱師であるだけでなく、江戸時代最大のツアーを創出した観光業者であり、かつ宿泊業者をも兼ねた存在であった。そして檀家たちからみると、御師の屋敷で手厚いもてなしを受け、念願の参宮を果たすことは、信仰上の満足感とも相まって、ツアーのハイライトだったのである。

二、御師『三日市大夫次郎』邸の想定復元

御師の町・宇治山田

伊勢神宮のある宇治山田の地は、内宮・外宮を中心とした門前町（鳥居前町）として発展を遂げた。しかしそればかりでなく、都市運営の面からみると、非常に特殊な歴史をもっている。

律令制下に神宮の神領として定められた宇治山田は、荘園化の進む中世においては守護不入の保護策を受け、豊臣秀吉の実施した太閤検地も地元からの願い出によって免除されるという特別扱いを受けている。そうしたなかで神職（神人や神役人）を中心に自治意識が早くから醸成され、一五世紀半ばには宇治と山田それぞれに合議制に基づく自治組織（宇治年寄会合、山田三方会合）が形成され、実際の都市運営に当たるようになった。

その背景には、中世以来の宇治山田における活発な経済活動があった。とりわけ外宮の山田の町は、神宮への入口に当たる宮川に近いといった地理的条件もあり、多くの座（米座・麹座・酒座・油座・紙座・綿座・御器座など十数種）が形成された。三日市、五日市、八日市、古市といった市場も数多く開かれ、旺盛な経済活動を背景に裕福な商人層が台頭したのである。

こうした商業活動の中核をなしたのは、神役人とも呼ばれる御師たちであった。彼らは物品の交易だけでなく、御師の権利を株形式（師職株）にして売買したり、大夫銘の譲渡（銘譲）も行った。組織や権利、ブランドをも取り引きの対象とする自由な経済活動を展開し、その財力を背景に町の自治運営を推進したのである。そのため江戸時代には、幕府は宇治山田の独自性を考慮し、監督のための山田奉行を設置している。

山田の町の繁栄ぶりは、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の第五編冒頭にも次のように描写されている。

「川崎（伊勢）音頭に、伊勢の山田とうたひしは、和名抄の陽田といへるより出たるにや。此町十二郷ありて、人家九千軒ばかり、商賈（しょうこ）夥をならべ、各々質素の荘厳（しょうごん）濃にして、神都の風俗おのづから備り、柔和悉鎮（しっちん）の光景は、余国に異なり、参宮の旅人たえ間なく、繁昌さらにいふばかりなし」

商家の造りが派手ではなく、「質素の荘厳濃」であるという一九の表現には、神の都としての特殊性を基盤とした上に、商業的発展を遂げた町の性格がよく表われているといえるだろう。

繁栄の推進役であった御師の数は、江戸時代になると急速に増加した。歴史的資料の比較的よく残っている山田の外宮御師の場合、一五九四年（文禄三）に一四五軒（別資料では一七三軒）であったものが、一六七一年（寛文一一）には三九一軒、一七二四年（享保九）には六一五軒にもなっている。これに宇治の内宮御師を加えると、最盛期には伊勢の御師の数は八〇〇軒をはるかに超えたであろうと推測されている。

大西源一著『大神宮史要』は、「中古以来、宇治山田の社会は、主従二大階級によって、統制されていたが、其の主と称するものは御師であり、従は即ち一般町民……」と記している。こうした表現もあながち誇張とはいえないほど、宇治山田は御師の町として栄えたのである。

その伊勢の御師には、四つの階級があった。山田の場合には神宮家・三方家・年寄家・平師職に分かれていた（宇治の場合は、三方家に相当する地位を会合家と呼んだ）。神宮家は正員の禰宜で御師を兼職している者、三方家は三方会合の年寄で御師をしている者、年寄家は各町内の年寄をつとめる御師、そして平師職は役職をもたない御師である。

神宮家は伊勢神宮の正式の禰宜であり、祭祀に専念する立場にあったため、山田一二郷と呼ばれる地域全体の実権を掌握していたのは三方家であった。山田の三方家を構成する御師は二四戸あり、そのうち従来からの権禰宜（度会姓・荒木田姓）が一二戸、ほかは異姓家であった。

三方家でもとくに有力な御師たちは、日本各地に数多くの檀家を有し、地元には広壮な屋敷を構え、邸内に立派な神楽殿をもつ者もあった。そうした実力者の揃った三方家の御師のなかでも、随一の規模を誇ったのが今回復元の対象となった三日市大夫であった。

『三日市大夫次郎』邸の想定復元

①御師・三日市大夫について

伊勢の御師で規模の大きなものは、活発な経済活動を背景とした山田の町に多く、三日市大夫、龍大夫、久保倉大夫、春木大夫、福島みさき大夫、橋村肥前大夫などが知られている。

一七七七年（安永六）の『外宮師職諸国旦方家数覚』の記録によると、三日市帯刀（たてわき）家の檀家数は三五万三〇九〇軒、久保倉弾正家は二六万九一〇三軒、福島相模家は一八万五一七八軒となっている。三日市大夫にはいくつかの分家もあり、勢力の大きさは図抜けていたといえるだろう。三日市大夫の檀家は、公家の植松家、武家の細川家などを筆頭に、北海道全域、陸奥・出羽・上野・下野の大半、越後・播州・日向・佐渡の一部、それに江戸・京都となっていて、東北や関東を中心に広範にわたっていた。

『宇治山田市史資料・家職編7』に記載された三日市大夫次郎家の由来によれば、三日市氏の本姓は橘氏で、度会郡黒瀬村に居住して一時は黒瀬氏を名乗り、山田の三日市場に移住してから三日市氏を称したとある。こうした経緯から判断して、三日市場の交易で財をなし、地域の実権を握り、御師・三日市大夫となったのであろうとする説もある。三日市場は中世から開けた市場で、現在の伊勢市役所などのある岩淵町にあった。

また同書には、応永年間（一三九四～一四二七年）の資料に「三日市場大夫次郎秀延」の名称がみられるとし、この秀延を三日市家初代とすることから、室町時代にはすでに御師となっていたと推察することもできる。

その後、三日市大夫は江戸時代を通して屈指の檀家数をもつに至り、外宮を代表する御師となった。その間の詳細は不明だが、一八七〇年（明治三）の記録として、三日市大夫が全国の檀家に頒布した大麻の配札数が三七万七二〇〇余体とある。また伊勢市民俗調査会編『伊勢市の民俗』所載の古老たちの座談会（昭和一〇年）によれば、明治初期の時点で三日市大夫の下で全国の檀家廻りをする代官が一八軒もあったとされ、近代に至るまでその勢力を維持していたことがうかがわれる。

②『三日市大夫次郎』邸の復元作業

伊勢参りの原動力ともなった御師制度は、一八七一年（明治四）明治政府の廃止令によって壊滅的打撃を受け、急速に衰退した。その後、一部の御師は旅館業などを営んでいたが、さらに明治一〇年代の再廃止令により、多くの御師は消滅した。繁栄を誇った広壮な御師の屋敷も、押し寄せる近代の大波に呑み込まれ、ことごとくその姿を消したのである。

現在では、門などのごく一部の遺構を除き、往時の面影を伝える建造物は皆無に等しい。伊勢参りの盛んになった室町時代から、観光化の進んだ江戸時代の数百年間もの長きにわたり、数え切れないほどの人々が宿泊したであろう御師邸。その実際の姿が、いまや分からなくなりつつあり、御師の存在すら忘れられようとしているのである。

中世から近世にかけての日本人の伊勢信仰と、その陰の推進役であった御師の存在を知るための象徴的な建築、それが御師の屋敷ではなかっただろうか。その姿を、できれば最盛期の江戸時代の姿をなんとか復元できないものか、その思いが今回のプロジェクトチームの出発点となった。

いかに広壮な屋敷だったとはいえ、民間の一建築物に過ぎない御師邸に関する資料はきわめて少ない。そんななかで最初に出会ったのが、今回の復元作業の基礎となった「三日市大夫次郎邸平面絵図（図版

1、正式表題は『宇治山田市大字岩淵町百貳番地土地物件ニ関スル調書附属図面』。以下、平面絵図と略す)」であった。

この平面絵図は、伊勢市の神宮文庫によれば明治期の土地物件調書に添えられたとされる原図を、一九二八年（昭和三）に神宮司庁が影写したものであり、神宮文庫による復刻図も刊行されている。一九〇七年（明治四〇）に御幸道路建設工事のために、屋敷は中央部で分断されたが、その時の道路位置なども書き込まれている。

また平面絵図に添付された説明によれば、三日市大夫次郎邸は御師制度の廃止後も、多くの御師邸が消え去るなか、参宮者のための旅館として営業を続けた。そして御幸道路建設によって建物は大きく削られたものの、残りの部分は維持され、一九四五年（昭和二〇）七月の空襲で焼失したとされている。

そこでプロジェクトチームは、さらに詳細な資料を求めて現地の伊勢市へと赴き、三日市大夫次郎邸の旧所在地の確認や、歴史資料の取材、参考となる伝統的建造物の見学などを数度にわたり実施した。

その結果、前記の平面絵図のほか、江戸期の古地図、三日市大夫邸を描いた銅版画、正面外観及び内部写真などの資料を入手することができ、これらを基に復元作業を行った。また、御師邸の建築全般にわたり、三重大学地域共同センター助教授・菅原洋一氏にご教示をいただきながら作業を進めた。

◎三日市大夫次郎邸の立地

三日市大夫次郎邸の平面絵図には、「宇治山田市大字岩淵町百貳番地」という住所が記されている。この住所を伊勢市の明治期の地図、及び現在の地図と照合すると、伊勢市役所や伊勢税務署のある一角にあたる。実際に現地に赴くと、税務署の敷地内に三日市大夫次郎邸の旧地であることを示す小さな碑があり、明治期における所在地を特定することができた。

図版1　三日市次郎大夫邸平面図「宇治山田市大字岩淵町百貳番地土地物件ニ関スル調書附属図面」／神宮文庫所蔵

そこでプロジェクトチームは、さらに古い時代の資料の調査を行った結果、『寛永年中山田郷内惣図』（図版2）のなかに三日市大夫の名を見出した。この古地図は、江戸時代初期の寛永年間の山田郷全体を描いたもの（文政年間の写し）で、森に囲まれた外宮を中心に、寺院や御師邸などの主要な施設名が記載されている。その一角、外宮のすぐ近くに、三日市帯刀、三日市兵部の二軒、さらに隣接して久保倉大夫の二軒、合計四軒分の御師の名が記されている。

三日市帯刀家は、前述のように江戸時代には三五万余の檀家数を誇った伊勢最大の御師である。古地図に示された屋敷の所在地は、外宮との位置関係などから判断して、明治期の三日市大夫次郎邸と同じ場所と思われる。

さらに興味深い点は、その敷地形状を古地図（寛永期）と平面絵図（明治期）とで比較すると、ほぼ一致する（古地図では前面道路側は細長い路地風の敷地形状となっているが、敷地全体の形状には大きな差異はない）。これらのことから三日市大夫次郎邸は江戸期から明治期を通して同じ場所にあり、ほぼ同じ敷地規模を有していたと考えられるのである。

古地図から三日市大夫次郎邸の立地条件を考えると、中世から市が立ったほどの交通の要地であり、繁栄した山田の町のなかでも外宮の近くという恵まれた場所にあり、さらに内宮へ向かうにも都合の良い位置を占めていたことが分かる。

この地には隣接して三日市大夫家と久保倉大夫家の四軒が並んでいた。伊勢を代表する御師の本家・分家が、外宮の深い森を背景に美しい甍を連ねて並び建つ姿は、さぞかし壮観だったであろう。

◎三日市大夫次郎邸の建築構成

三日市大夫次郎邸の平面絵図は、菅原洋一氏の研究によれば一九〇六年（明治三九）から一九〇七年

（明治四〇）頃に実測作成されたものと推定されている。したがって平面絵図は、復元の目標である江戸期ではなく、明治末期の姿を伝えるものである。

しかし、御師制度が廃止され、御師の勢力が衰えつつある明治期になってから大幅な改築が行われたとは考えにくいこと、明治期にも従来通り旅館として営業していたこと、一九〇七年（明治四〇）の御幸道路建設により敷地が分断される以前の姿を伝えていることなどを考慮すると、一部に変更はあったとしても、平面絵図の内容は江戸期の姿をまだ色濃く伝えていると解釈することができる。

また平面絵図は、土地物件調書の附属図面という性格もあって、全般にわたり詳細な書き込みがみられる。その内容は、内部空間については室名、帖数、柱間寸法、建具の種類、床の材質、井戸や下水の位置など、また外構では樹木、飛石、灯籠、池、塀の種類に至るまで克明に記されていて、建築の規模や様式を知るにも貴重な資料である。

そこでプロジェクトチームは、平面絵図を復元の基礎資料としつつ、細部の意匠などには江戸期の雰囲気を再現しながら、できるだけ全盛期の姿へのアプローチを試みた。

図版2　寛永年中山田郷内惣図（部分）●印は三日市大夫次郎邸／伊勢市立図書館蔵

〈敷地及び建物の概要〉

三日市大夫次郎邸の平面絵図は、一見してすぐに奥行の深い大規模な木造建築の姿を想像させる資料である。敷地は、間口約五五メートル、奥行約一三〇メートル、総面積約一八〇〇坪、建物の総床面積は約八〇〇坪に及ぶ。敷地は門と塀で囲まれた郭的構成となっていて、これは同じ山田の御師として栄えた龍大夫、久保倉大夫などの屋敷と共通するもの。建物規模は最大であり、伊勢随一の御師にふさわしい。最近の木造建築では体験しえないほどの、スケールの大きさである。

細長く広大な敷地に、棟をいくつも連ね、随所に庭を配置した構成は、バランスが良く破綻がほとんど感じられない。棟によって軸線に若干の違いがみられるが、これは長い歴史のなかで増改築を繰り返した結果と思われる。平面絵図には書き込みが多く、内外の境界の分かりにくい部分などもあり、細部に至るまでの読み取りには長時間を要したが、色分けして整理すると、各棟のつなぎや大小の庭の配置にはたくみな計画性が感じられた。

明治期の銅版画『三日市大夫次郎邸之図』（図版3、堀田吉雄氏所蔵）には、門前両脇に隅櫓を設け、大きな長屋門を構え、その向こうに屋根を連ねていくつもの棟が建ち並ぶ様子が描かれていて、この絵からも建物の規模の大きさと豪壮な雰囲気をうかがい知ることができる。

御師邸らしい特徴も随所にみられる。

武家屋敷を思わせる門前両脇の隅櫓や長屋門、常夜灯の並んだ前庭などは檀家である参宮者を迎える装置であり、数多くの客室や広々とした台所は旅館としての純機能的空間、そして奥にある神楽殿（神殿）と大広間、玄関近くにある風呂場（潔斎のためにも使用されたと思われる）などは、御師邸が信仰と密着した空間でもあることを物語っている。

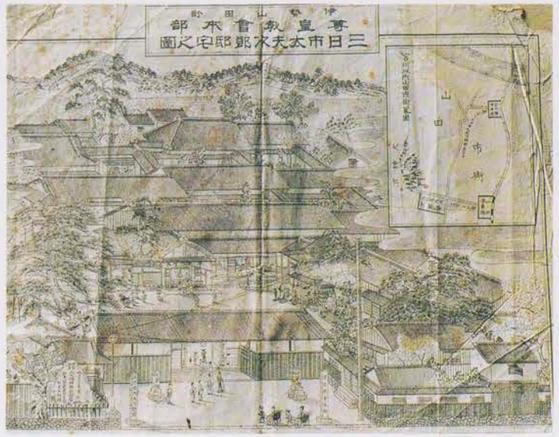
常夜灯に火の入る薄暮の時刻、御師邸に到着した人々は長屋門をくぐって前庭に入る。前庭は二五メートル角の広々とした空間で、開けた視界の向こうには瓦屋根を幾重にも連ねた棟がみえ、その豪壮さに目を見張ったことであろう。前庭には、動線に沿い常夜灯が並べられ、人々は灯りのもてなしを受けながら導かれるように奥へと進み、正面玄関横の小さな門をくぐり、吸い込まれるように中庭へと入る。視界は一気にせばまり、小さな常夜灯に照らされ落ち着いた中庭には内玄関があり、そこで草鞋を脱ぎ、いよいよ御師邸に上がる。

畳廊下や渡り廊下を通り、棟から棟へ、奥へ奥へと案内されながら、客たちはその広さを身を持って実感することとなる。三日市大夫の屋敷はうっかり入ったら迷子になる、そんな噂が近代に至るまで残っていたという。風呂で旅の垢を落として身を清め、ひと息ついた頃、裃に威儀をただした御師が現われ、丁重な挨拶を受ける。それから金欄に飾られた神楽殿へと向かい、厳粛な雰囲気のなかで神楽を奉納した後、広間での直会となる。二の膳、三の膳付きの本格的な料理と酒を存分に味わい、やがて結構な造りの庭に面したそれぞれの部屋に戻ると柔らかい絹の組夜具が敷かれている……。

こうした一連のシークエンスを踏まえた、格式と演出効果、そして機能性とを合わせもった空間構成を、平面絵図から読み取ることができる。

〈建物の平面構成と機能〉

三日市大夫次郎邸の屋敷の規模は総床面積約八〇〇坪に及び、客室棟五棟、神楽棟（神楽殿・広間）、台所棟、住宅棟、付属棟（蔵・門・納屋など）から構成されている。床面積から各部分の構成比率をみ



図版3　三日市大夫次郎邸之図　明治30年代(推定)の銅版画／堀田吉雄氏蔵

ると、客室二六%、神楽殿・広間一〇%、台所・執務二三%、住宅七%、蔵・門一五%となる。

また、機能面からみると、建物は玄関部分を境界として、客室側（客室・神楽殿・広間・風呂場など）と、もてなし側（台所・住宅など）に分かれている。

・門構え

平面絵図、銅版画のほか、三日市大夫次郎邸の正面部分を写した外観写真（図版4・5・6、明治期～大正期）をみると、門はいずれも長屋門となっている。ただし、前述した江戸期の古地図では、前面道路取り付け部分が路地風の細長い敷地形状となっていることから、以前は薬医門であった可能性もある。御師邸の薬医門としては、福島みさき大夫邸のものが移築保存されている。どちらの形式の門も、訪れる者に格式を印象付ける効果があるが、三日市大夫次郎邸では門前両脇に隅櫓を置き、いっそう荘重な景観を生み出している。

・玄関

玄関は、長屋門を入った正面に当たり、三日市大夫次郎邸の正規の出入口と考えられる。奥には茶器室、隣接して事務室がある。公家や武家などの賓客は、この玄関から奥に通され、一般の客（壇家）は横の小さな門を潜り、内玄関を利用したものであろう。

・客室

客室棟は、中廊下型三棟、片廊下型二棟の計五棟から構成されている。広さ四畳～一六畳の部屋が計三二室あり、四室を除くといずれも庭に面した造りとなっている。

平面絵図では、客室に一号～四三号までの番号が付けられているが、そのうち一六号～二六号までの一一室分が見当たらない。この客室番号が三日市大夫次郎邸における固有の番号であるとすれば、この欠番部分は焼失、建替などの事情により減失した部分を意味する可能性がある。番号の並びからは、欠番部分はほぼ広間、神楽殿部分に相当するものと思われる。

客室の畳数合計は二八八・五畳（広間と廊下を除く）あり、この数値から宿泊人数を試算してみた。宿泊客一人あたり三畳として計算すると、九六人程度ということになる。これは檀家を客とし、豪華な絹の夜具などをゆったりと敷き、余裕をもって過ごせることを前提としている。建物の規模の割りに少なく感じられるが、便所の数を調べると、大便用一一カ所（裏方七カ所）、小便用五カ所（裏方一カ所）であることからも、妥当な数といえる。

井原西鶴は『織留』のなかで、御師邸への宿泊客を二千、三千と書いているが、これはあくまでも文学上の誇張に過ぎない。もっともおかげ参りの時のように、数え切れないほどの参宮者が一挙に押し掛けた場合には、広間や畳廊下なども利用して数百人の単位で客を寝泊りさせたであろうことは十分に想像される。

客室棟の様式は、書院造りを取り入れているが、書院の重要な要素である床の間と違い棚をもつ部屋は一五室にとどまり、上段の間や次の間をもつ本格的な書院はみられない。また書院風の部屋と普通の客室とのあいだには特別な隔てはなく、同じ棟内に混在している。書院造りの格式を一部に応用しながらも、機能性や効率を重んじた柔軟な客室構成を行っていたものといえるだろう。なお菅原洋一氏の研究により、久保倉大夫邸には賓客用として独立した本格的な書院棟が、また龍大夫邸には一般客室と同じ棟に二つの書院があったことが確認されている。

客室のもう一つの特徴は、現在の旅館とは異なり、三室を除き、ほとんどの部屋に押し入れがないことである。別な場所に夜具置場が二カ所あることから、布団類は御師邸の下働きたちによってそのつど各部屋まで運ばれ、再び片付けられたものであろう。

・神楽殿と広間

神楽殿は、建築上ばかりでなく、御師の経営上も非常に重要な施設であった。

明治初期（一八七〇年）の三日市大夫次郎邸の収益内訳を比率でみると、初穂料六四・九%、神楽料二一・九%、止宿料一三・二%となっている（菅原氏による）。床面積の比率では、客室（二六%）に対して神楽殿・広間（一〇%）に過ぎないが、収益の上では神楽料が止宿料を大きく上回っており、その重要性を知ることができる。

ただし神楽殿をもつ御師は、三日市大夫のほか、龍大夫、橋村大夫など一部に限られていた。神楽殿をもたない御師邸では、広間の建具をはずし、柱を金欄で飾り、神楽を執行したとされている。

神楽殿の位置は、御師邸のもっとも奥を占めることが多いが、三日市大夫次郎邸では奥にあると同時に、

図版4　三日市大夫次郎邸外観写真　明治40年代(推定)／伊勢市立郷土博物館蔵
長屋門左側から道路側二階蔵までを写したもので、現存するもっとも古い資料と思われる。三日市大夫次郎邸の標柱、灯篭、松の大木等が見られる。中央に写る住宅棟の屋根にムクリが見られ、図版3の銅版画の特徴をよく表している。

図版5　同上　長屋門　明治40年代後期～大正前期(推定)／伊勢市立図書館蔵
長屋門ほぼ正面からのもので、入り口左側には大きな表札が見える。また、正面奥の玄関や平面図にない門内右奥の建物が見える。

図版6　同上　昭和13年／大島順一氏蔵
長屋門左の塀側から西隅櫓までを写したもので撮影年月の記録もある。標柱が基礎だけ残し取り払われ、図版4の松の大木もないが、隅櫓の外観や長屋門の全体、賄場の棟の一部など克明に記録され、門前の雰囲気が理解できる一方、堅く閉ざされた門は御師邸の役割の終焉を感じさせる。

どの客室棟からも行きやすい場所にある。また、神楽殿と広間のあいだには白石敷きの緩衝空間を設け、独立性を高めていることが大きな特徴となっている。

明治期から大正期のものと思われる三日市大夫次郎邸の神楽殿の内部写真（伊勢市立図書館所蔵のアルバム中に所載）では、白石敷きの部分はみることができないが、床面を高くして入口に階段を設けて昇殿する形式とし、高欄をめぐらせた様子を知ることができる。高欄は、飾り金具とともに伊勢神宮の様式に沿った形状とし、材質は檜を用いている。

神楽殿の資料としてはもう一点、『伊勢太々神楽執行之図』（図版7）と記された絵画資料が残っている。中央に据えられた釜の前に「三日市大夫次郎」の名が書き込まれていることから検討を行ったが、平面絵図と一致しない。神楽殿に関しては、明治の初めに焼失し、再建されたとの情報もあるが、よく似た神楽執行図が比較的数多く残されていることを考慮すると、同図は伊勢土産として広く模写されたものに三日市大夫次郎の名を書き入れた可能性が高い。したがって今回は、復元の資料とするより、神楽の様子を知る参考資料にとどめた。

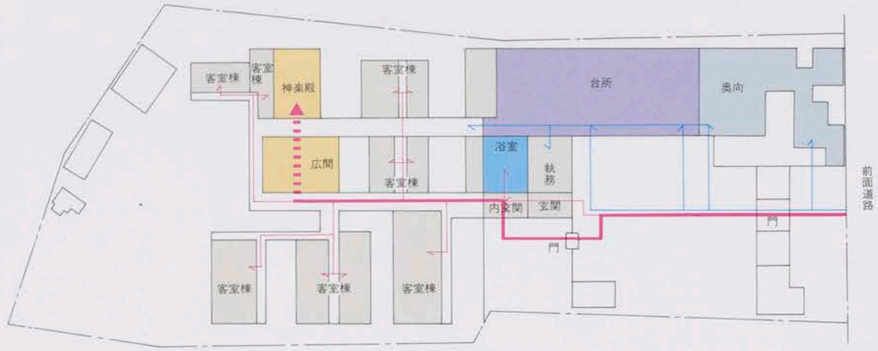
神楽殿と並ぶ広間は、神楽を見物したり、その後の供応の場として使われる空間である。平面絵図には広さ五十七畳と記されていて、実際に畳割りをすると合致しないため、床の間の畳も含めた畳数として8、伊勢市立図書館アルバム）が残っていて、三方を囲む畳廊下や広間のインテリアがよく分かり、平面絵図とも一致する。ただし、神楽殿側の畳廊下の建具が腰紙貼りの壁となっていて、これでは神楽の見物ができない。おそらく御師制度の廃止後に改装されたものであろう。

・台所

御師邸の台所の様子は、井原西鶴の『織留』や鳥居清経画『伊勢参宮初心書』、川口呉川画『御師邸内図』などに、文章や絵画によって描写されている。いずれも土間に大釜、大鍋をいくつも並べ、板の間には数え切れないほどの膳や椀、皿が置かれ、大勢の人々が戦場のような忙しさのなかで賄いに精を出している。

実際、一〇〇人近い客に二の膳、三の膳付きの本格的な料理を提供するとなると、賄い方は一日を忙

殺されたはずである。西鶴は、伊勢の御師邸で出される焼物は両面を焼くということはない、なぜなら魚は湯のなかで茹であげ、熱した小手を片面に当てて焼き目をつけるだけだから、などと揶揄している。その真偽のほどは不明だが、御師邸では膨大な量の料理をこなすだけの大規模な台所が必要であったことは確かである。



各棟の機能と、参詣客と賄方の動線図　―― 参詣客の動線　―― 賄方の動線

三日市大夫次郎邸の台所も、やはり巨大である。土間と板の間を合わせると一二〇畳にものぼり、邸内では最大の空間を構成している。また、柱と柱のスパンは、木造家屋としては大きい五メートル前後にもなっている。

台所は、住宅棟と客室棟の中間にあり、動線上の重要な位置を占めている。板の間には隣接して賄い取締人室、料理人室、下男室、物入など、土間部分には釜場、流し、魚焼場など、また竹を敷いた洗い場付近には青物魚類入れ、魚冷やし場などが整然と配置されている。人と物の動きを考え、機能性や効率を第一とした構成であることが分かる。

・住宅

住宅棟は、前面道路に近く、門脇の一角を占めている。台所に近い部分は、二畳～八畳の部屋がいくつもの小さな庭をはさんで連なっている。床の間や濡れ縁をもつ部屋があるほか、湯殿や化粧室を備えており、御師とその家族の私的な生活の場と、家族の接客のための奥座敷などの空間と考えられる。大きく二群に分けられることから、二世帯～三世帯が暮らしていた可能性もあり、部屋の用途を限定しない日本の住宅だけに多様な推察が可能である。

道路側の二階建の建物は、上下階ともに一〇畳の広間をもつ独立した建物である。門前へと出る独自の出入口があり、単独の機能をもっているようにみえる。三日市大夫次郎邸の正面写真で外観をみると、屋根には他の棟にはないムクリがみられる。現存する小西万金丹の建物にも近い意匠だが、室内は床の間などのない簡素な作りであり、使用人の詰め所、寝室、門前の監視所などを兼ねた建物と思われる。門前への出入口は、いわゆる勝手口の機能をもつものであろう。

図版7　伊勢大々神楽執行之図　湯釜の下に「三日市大夫次郎」の銘が見える／伊勢市立図書館蔵

図版8　神楽殿大広間／伊勢市立図書館蔵

・水路、その他

平面絵図には、排水路や雨落溝も書き込まれていることから、ここでも検討を行った。三重県名張市の藤堂家旧邸跡から発掘された排水路の資料を参考に、縁部分に石を並べ、側面及び底面を漆喰で固めた形式とした。

なお平面絵図の読み取りに際しては、全般にわたり随所に壁や建具の表記されていない部分が多くみられた。これらについては、用途と動線を推測し、室内外を区分し、間仕切りの種類を決定していった。一例を

あげれば、風呂場の炊き付け場とみられる土間スペースは、室内か室外かの表記がないが、用途などから外部空間と判断した。

〈屋根形状について〉

前述した明治後期の銅版画『三日市大夫次郎邸之図』は、パースのない日本の伝統技法で描かれたもので、道路側からみた鳥瞰図であり屋根形状を判断するための貴重な資料である。平面絵図と比較すると、画面構成の上で一部の蔵を移動したり、渡り廊下などの屋根形状に違いがみられるものの、おおむね一致しており、細かい部分までよく表現されている。また、三日市大夫次郎邸の正面外観写真にみえている部分ともほぼ一致していることから、銅版画の内容は全体を正確に表現しているものと判断した。

屋根形状は、客室二棟と長屋門脇の隅櫓が入母屋、広間の一面が寄棟で、ほかはすべて切妻となっている。

平面絵図に、「附庇」「土庇」「縁庇」「葺釣シ」「板庇」「出桁」などの屋根の形状を示す書き込みがみられるが、これらも銅版画の内容とほぼ一致する。また、梁間などの棟のかたまりを示す構造寸法の書き込みがあることから、これを参考にして柱の位置や通りを検討しつつ屋根伏の形状を決定していった。

屋根勾配は、銅版画及び伊勢地方の町家の事例を参考に、四寸～五寸勾配のあいだで決定した。玄関の一部と道路側二階屋の屋根にはムクリを付けた。

葺き材は桟瓦としたが、長屋門には二列～三列の丸瓦のまぜ葺きがみられる。けらば（妻側の両端）の二列の丸瓦は、本来は風で飛ぶことを防ぐ目的があり、他地方でもみられるものだが、この場合にはデザイン的手法と思われる。

屋根に関して今回もっとも難航したのは、台所部分であった。銅版画では、長い谷形状（凹部）をもつ屋根として描かれているが、雨仕舞いの点で不自然であり、また平面絵図にみる柱間の飛び具合（間隔）からも現実味が薄い。また、台所の屋根の一部がみえている正面外観写真の図版4と図版5を比較すると、棟の長さ、位置、鬼瓦の大きさなどに違いがみられ、図版5が改築された状態を示している可能性が高い。

そこで、さらに銅版画や平面絵図とも詳細に比較検討した結果、図版4に基づいて復元を行った。図版4の写真から撮影のスタンディング・ポイントを求め、そこからのライン上に鬼瓦の位置を想定し、もっとも妥当と思われる棟の位置を決定した。

増改築などで生じたと思われる棟の角度の振れや、屋根のおさまりは、ともすれば不自然な形状となる可能性があり、図面作成上とくに気を配った点でもある。

〈立面構成〉

立面の復元に当たっては、銅版画や正面外観写真のほか、伊勢地方に残る伝統的な町並（川崎、大湊、神社町、二見旅館街など）や家屋（麻吉旅館、小西万金丹、二軒茶屋餅など）を数多く見学し、参考とした。

伊勢地方の伝統的町家は、妻入りで側面に下屋を設けるものが多く、他の地方では平入りが一般的であるのと好対照をなしている。三日市大夫次郎邸でも道路側の二階建て建物は、この地方の町家と類似した外観となっている。また、外壁面は下見板張りとするが、軒下回りには「張出しなん張り」と呼ばれる張出し壁を設けることが大きな特徴の一つである。張出しなん張りには、外壁を風雨から保護する役割があり、この地方独特の様式となっている。

しかし、三日市大夫次郎邸については、銅版画などをみても張出しなん張りはまったくみられない。これは御師邸と一般民家との違いとも考えられ、今回の復元では外壁は下見板張りとした。

建物の棟高については、銅版画のほか、見学した伊勢の民家を参考にし、屋根の重なり具合などから決定していった。細部の意匠は、平面絵図の表記や銅版画などから判断したが、ガラス窓部分は障子に変更するなど、江戸期の様式を再現するように努めた。開口部は雨戸、板戸の付いていない部分については格子打とした。また、台所の上部には煙出しと採光用の高窓を設けた。

作業を終えて

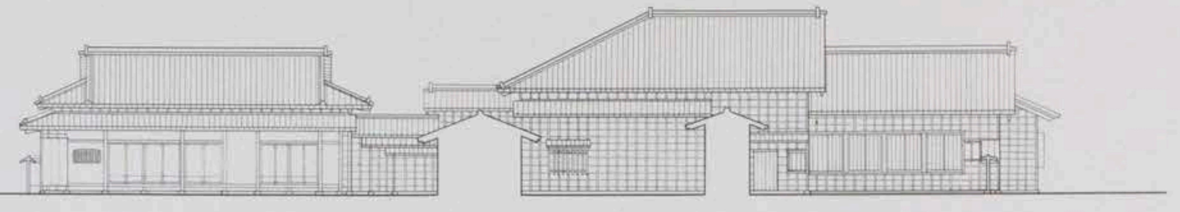
今回の復元は、建物もさることながら、「御師とは何か」という基本的な知識を学ぶ作業から始まった。作業が進むにつれ、伊勢の御師たちの活動のスケールや、その母体ともなった御師邸の規模にふれ、あらためて御師の果たした役割の大きさに目を見張った。

御師邸は、中世から近世にかけて全国から伊勢参りに訪れた数え切れないほどの人々が宿泊し、一生に一度の貴重な思い出として、その姿を記憶していったものである。それが現在は、残念なことに一軒も残っていない。御師邸の復元は、ある意味では近世までの日本人の生活や心のあり様にもふれるものと考え、できる限り細かい部分にまでこだわって作業を行った。

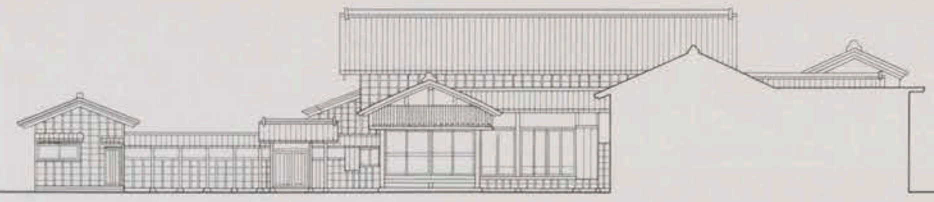
復元を終えてみると、御師邸は十返舎一九の記した「質素の荘厳こまやか」という表現にふさわしい、神の都の建物であることが肌で感じられた。その一端が読者にも伝わり、御師についての理解を深めていただくことができれば幸いである。

なお今回の復元に当たり、ご監修いただいた三重大学地域共同センター助教授・菅原洋一氏をはじめ、三日市彰氏、西川順土氏、堀田吉雄氏、伊勢市の神宮文庫、伊勢市立図書館、伊勢市立郷土資料館、東京の神社本庁など多くの方々にご協力いただきました。改めて御礼申し上げます。

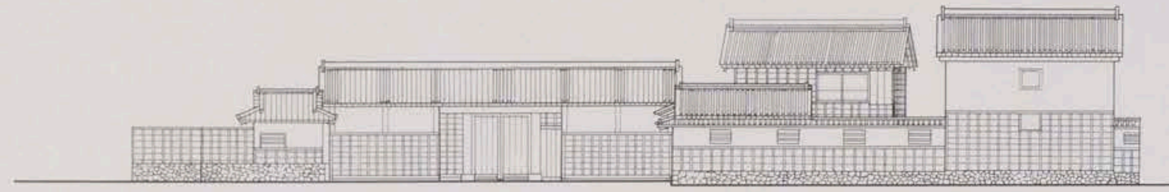
三日市大夫次郎邸復元図



立面図ホ～ホ'



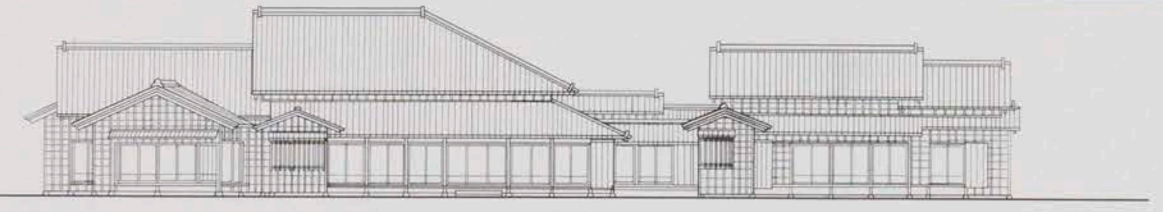
立面図ハ～ハ'



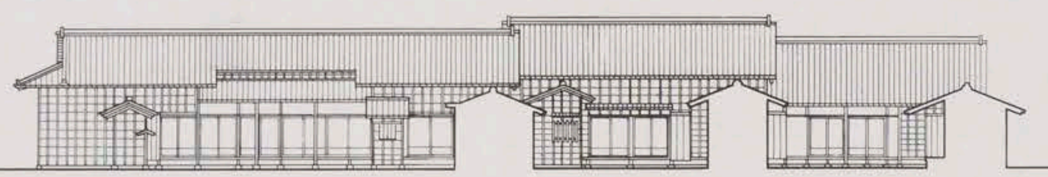
立面図イ～イ'

屋根伏図

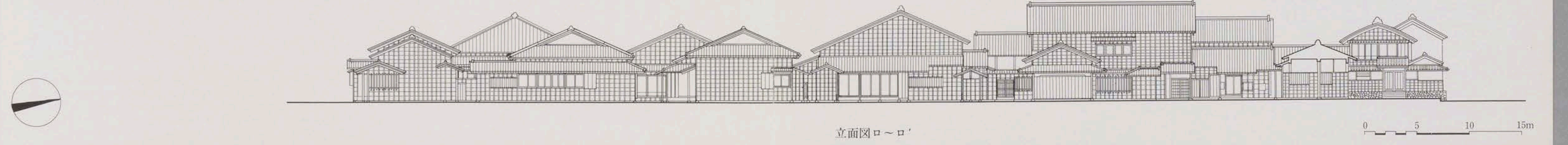
平面図



立面図ヘ～ヘ'



立面図ニ～ニ'



立面図ロ～ロ'